

特別報告

南蛮人が長崎にもたらしたもの - キリシタンの文化活動 -

Lo que introdujeron los “Namban-jin” en Nagasaki¹⁾

荻原 寛

OGIWARA Yutaka

1. 長崎県のキリシタン小史

キリシタンの歴史は、Francisco de Xavier の鹿児島上陸(1549年)から島原の乱(1637-8年)までを、比較的布教活動が自由だった時期、禁教と交易の揺らぎの中で殉教が始まる時期、大規模な迫害と殉教が相次ぐ幕藩体制黎明期、の三期に分けて捉えることができる。ただし、その境界は互いに交じり合って截然と分けられるものではない。実際、この時代の精華とも言うべき、天正の遣欧少年使節は出発時(1582年)は布教の絶頂期であったが、大人となって帰国した年(1590年)は、秀吉の伴天連追放令が出てからすでに3年を闊していた。以下、主だった宣教師の活動を中心に、長崎県内におけるキリシタンの歴史を概観する。

1. 1. 草創期

日本から逃げてきたヤジロウ(アンジロウ)なる人物と出会って背中を押された Xavier は、²⁾ 大住(1999:77)によると、インド管区での布教を早々に切り上げ、Cosme de Torres らを従えて日本をめざした。1549年、奇しくも聖母マリア被昇天の祝日の8月15日に鹿児島上陸。³⁾ 一年後、天皇の布教許可を求めて上京した一行が薩摩領外で最初に停泊した港は松浦領の平戸であった。室町時代を通じて、大陸への表玄関は博多であったが、大陸への中継基地であり、倭寇貿易でも栄えていた平戸では、仮倭の頭領である徽州出身の元塩商人、五峰王直が明の海禁政策を逆手に取った密貿易で巨万の富を蓄え、領主松浦隆信の厚い庇護の下、2000名の配下と共に根城を構えていた。Xavier が平戸に立ち寄ったのは、ポルトガル船が平戸に初めて来航したとの知らせを受け、イエズス会からの自分宛の書簡が届いていないか確かめるためであったが、当時の資料によると、ポルトガル船の平戸来航も、ポルトガル商人と広東で密接な関係にあった王直の手引きによるものだった。⁴⁾ 太田(1999:58-59)によると、平戸で約100名を授洗した Xavier は Torres を平戸に残し、山口を経て京に向かうが、天皇の權威は失墜し、將軍義輝も戦乱の都を離れて不在で、中国での布教と同様に最高統治者の許可を得る目的が果たせないまま平戸に戻り、一旦山口で宗教論争をしたあと、1551年に永久に日本を去った。若桑(2003:95)は、天皇の謁見拒否に関して、Xavier の貧しい身なりや献上品のみすぼらしさに原因があるよりも、天皇そのものが神または神に等しい存在であって、異国の神を奉ずる者には会えないという知識が、Xavier 側に欠如していた点を指摘している。

Xavier が離日し、Torres が山口にとどまると、平戸には山口や府内(大分)から派遣された修道士や神父がしばらく滞在する形が定着した。この間の1552年に平戸に入港した船から一人のポルトガル商人兼医師が降り立った。

Luis de Almeida である。1555 年に再来日して平戸から府内に向かうと、一念発起して翌年イエズス会に入会。貿易で築き上げた莫大な私財をイエズス会に惜しげもなく寄進して、府内に病院を、豊後に孤児院を設立した。⁵⁾ 1561 年、平戸で絹取引をめぐる口論からポルトガル人船長以下 14 名が松浦家家臣に斬殺される事件が起き、治安の悪化を恐れた Torres が他に良港を求めたところ、大村領主大村純忠から横瀬浦(現西海市)を寄進する申し出があった。早速、平戸にいた Almeida を派遣し、自らも豊後から移動して 1562 年に開港となったが、その時に受洗して最初のキリシタン大名となった大村純忠(バルトロメウ)は、神社仏閣を破却し先祖の位牌を蔑ろにしたため、異父兄が謀反を起こし、横瀬浦は焼き討ちにあつてわずか1年4ヶ月で閉港となった。因みに、初来日した Luis Frois が降り立った港がこの横瀬浦であった。その後、紆余曲折があつて、1570 年に長崎港が開港となる。その間、Almeida と Torres は長崎県内各地で布教を精力的に推し進め、五島列島は Almeida が着手し、Torres は口之津や志岐など島原半島の布教に努めた。実弟大村純忠が改宗したのに次いで、有馬領主有馬義貞も口之津で第三代布教長となった Gaspar Coelho から 1576 年に受洗し、アンドレと称した。しかし、平戸は長崎県における最初の布教の地でありながら、松浦氏の反キリスト教的動きからポルトガル船が回避し、1564 年、南蛮貿易も終焉した。⁶⁾

1. 2. 最盛期

長崎とキリスト教の関係は、1567 年に大村家家臣で後に純忠の女婿となる長崎甚左衛門が Almeida を招いて布教させたことに始まる。2 年後に Torres は Gaspar Vilera を派遣して提供された廃寺を教会に建て替えて Todos os santos 教会と命名した。長崎で最初の教会であったが、長崎港開港の4年後、諫早の西郷氏と長崎南部の深堀氏の攻撃を受けた際に炎上し、後年再建しなければならなかった。大村氏は西郷氏、深堀氏のほかにも佐賀の龍造寺氏からも領土を狙われる弱小大名であったため、長崎を開港したものの外患が絶えなかった。

Xavier の来日からちょうど 30 年後の 1579 年に、イエズス会東インド管区巡察師の Alessandro Valignano が島原の口之津港に降り立った。赴任したばかりの Valignano に、大村純忠は自領の長崎と茂木の二箇所を港地としてイエズス会に寄進することを申し出た。信仰心からだけでなく、公益を戦費に充てられる上に、莫大な富をもたらす南蛮貿易から締め出されるのを恐れる敵は、ポルトガル人が商行為を行う土地には簡単に攻め込むまいという思惑があつた。一方、島原では家督を継いだ有馬晴信が翌 1580 年に Valignano から受洗して有馬プロタジオとなり、大村・有馬両家は血縁と宗教の両面で固く結ばれた。同年、Valignano は長崎と茂木の寄進を受け入れたが、内実は、支配権と徴税権がイエズス会に渡っただけで、司法権は大村氏の手中にあり、船舶に対しても貿易税は大村氏が徴収し、イエズス会の収入は停泊料のみであった。⁷⁾

Valignano の出現により、それまでの改宗に重きを置いた布教に、体系的な教育が加わった。Valignano の考えの基本は、日本の習俗を尊重し、宣教師たちに日本語や日本の文化・習俗を学ばせ、日本人司祭を養成しようという適応主義で、⁸⁾ その成果は弟子の Matteo Ricci が、1601 年に万暦帝の許可を得て行った明での布教で立証されることになる。Valignano は 1580 年に有馬に seminario を開設した後、同年から 81 年にかけて豊後、安土、長崎での計三回、宣教師協議会を開催して教育方針を固め、子どものための教会学校の上に、セミナリヨ、コレジヨ、

ノビシアード、画学会、語学校と、つぎつぎ設立していった。⁹⁾ この Valignano の適応主義は、1570 年から日本管区準管区長の任に当てていた Francisco Cabral の布教方針とは相反するものであった。Cabral らは日本語を十分に身に付けた上で布教すべしという命令を無視したばかりか、日本人に対してフィリピンや中南米の植民地人に対するのに等しい尊大かつ傲慢な態度で接したため、多くの棄教者や背教者を出した。1582 年、Valignano はついに Cabral を罷免する。¹⁰⁾ こうした経緯を経て舉行されたのが、大友、大村、有馬のキリシタン三大名の名代として、伊東、千々石、原、中浦の四少年をローマ教皇の許へ派遣するという一大イベントであった。¹¹⁾

1. 3. 迫害と衰微

キリシタン迫害の原因を突きつめれば、天皇および公家側の絶対的な拒絶、¹²⁾キリシタンによる寺院、仏像、墓石などの狂信的な破壊活動、¹³⁾ 秀吉の恐怖に基づく猜疑心、¹⁴⁾ フランシスコ会とくに Pedro Bautista の挑戦的な活動、¹⁵⁾ お家存続のための忠誠心表明の 5 点に集約される。1587年の秀吉の伴天連追放令の原因も、若桑(2003:397-402)によれば、Coelho が九州平定後の秀吉に謁見を求めて博多を訪れた際、フスタ船という数門の大砲を装備した 200~300 トンの船で長崎から乗りつけたことと、大型帆船を博多に回すことを拒否されたことにあったという。また、秀吉から布教しないことを前提に、マニラ総督からの返書を待つ間滞在を許された Bautista が、条件を無視して布教活動を盛んに行い、禁教令をイエズス会による布教の失敗と捉えたフランシスコ会士がマニラから次々と乗り込んで病院や修練院を建設していった。イエズス会は Valignano の順応主義に則って、日本の習俗と礼節を取り入れる形で布教していたが、フランシスコ会は清貧を至上とする姿勢を全く変えず、その貧しい身なりや振る舞いが却って支配層には無礼にあたることにまで思いが至らなかった。そうした活動は間もなく秀吉の耳に達する。そこへ迫害に一举に向かわせる事件が土佐で勃発した。1596年の San Felipe 号事件である。当時の海事法にあたる「廻船目目」が船主の権利を認めていたにもかかわらず、秀吉はスペイン船の積荷をすべて没収したのである。乗員に神父が2名いたのは禁教令に反するというのが理由であった。積荷の中の海図を航海士に問うたところ、スペインは先ず宣教師を送り、次に軍隊を送って征服すると答えたため、激怒した秀吉はフランシスコ会を中心とするキリシタンの大量処刑を命じたということになっているが、史実は、航海士にそのような発言はなく、派遣された奉行の増田長盛が自分の行為を正当化するために話を捏造したようである。¹⁶⁾ 26 名に絞込まれた処刑者は片耳を削ぎ落とされ、洛中引き回しのうえ徒歩で長崎へ移動させられ、1597年2月、西坂で磔刑となった。

豊後では、大友宗麟の後を継いだコンスタンチノ義統が秀吉の禁教令を恐れて早々に棄教し、領内のキリシタンを迫害。島原では、有馬晴信が、マカオで家臣 48 名が殺された報復に、紛争時の責任者の乗った Nossa Senhora da Graça 号を長崎港内に襲い撃沈する事件を起こし、そこに端を発した 1612年の岡本大八事件の責任を問われて死罪となる。家督を継いだ直純は、同年に発令された家康の禁教令に従って棄教し、キリシタンの妻を離縁して家康の養女と再婚すると、幕命に従って迫害に転じた。大村では、元遣欧少年使節の千々石ミゲルが棄教して千々石清左衛門となり、その従兄弟であり大村純忠の継嗣である喜前も棄教。法華宗となって伴天連を追放し、領内のキリシタンを迫害する。¹⁷⁾ その後、京を皮切りに元和の大殉教と呼ばれる大虐殺の時代が始まる。長崎で

は、1622年に56人という前代未聞の大処刑が行われ、以後は1633年には中浦ジュリアンを含む7人が殉教したのを始め1658年までに少なくとも230名が処刑された。¹⁸⁾ 大村、平戸、五島でも処刑は続き、これに三万人近い島原の乱の犠牲者が加わったがキリシタンは壊滅せず、¹⁹⁾ 相当数の信徒が信仰を潜伏させた。それは、厳しい檀家制度の中で、「崩れ」と呼ばれる大量検挙により村単位で散発的に露顕していくことになる。²⁰⁾

1. 4. 近世のキリシタンと近代のクリスチャン

1831年、ヴァチカンの布教聖省の委託を受けて日本への再宣教に乗り出したパリ外国宣教会は、1842年に幕府が薪水給与令を出したのを機に、1844年、マカオの極東支部から薩摩藩の付庸国であった琉球王国にフランス人宣教師1名と中国人伝道士1名を、1846年に2名、1855年に3名の宣教師を、それぞれ日本語学習と布教のため送り込んだが、厳しい監視の下、所期の目的を果たせなかった。1856年にフランス海軍付き司祭が函館に上陸したがやはり結果は同じであった。1858年に日仏修好通商条約が締結されると、日本代牧となった Prudence-Séraphin-Barthélemy Girard が、翌59年にフランス領事付き通訳兼司祭として江戸に入り、1862年にカトリック教会を横浜外国人居留地に献堂した。

長崎には、1863年に Louis-Théodore Furet が上陸して、横浜から派遣された Bernard-Thadée Petitjean らと合流し、1865年に大浦天主堂を献堂する。幕府は居留地内に教会を建てる自由は認めていたが、日本人の接近は固く禁じられていた。そうした厳しい官憲の目をかいくぐって、十数名の男女キリシタンが聖母マリア像を求めて大浦天主堂(土地の人にフランス寺と呼ばれていた)を訪れたが、²¹⁾ 信徒発見の喜びも束の間、潜伏キリシタンの信仰は教義そのものが大きく変容し、キリスト教とは呼べない神道に近い宗教になっていた事実に対処せざるを得なくなる。²²⁾ したがって、Petitjean らの仕事は改宗よりも、キリシタンを探し出して洗礼し直すことにあった。ことに Petitjean は、昔からのキリシタンの用語を用いたわかりやすい公教要理を書くことを目指して1868年に『聖教初学要理』を完成させ、1883年までに約80点に及ぶ「プティジャン版」と呼ばれる教義書を石版刷りで出版した。しかし、1890年に大浦天主堂で開催された日本初の教会会議で、地域密着型の教義書は好ましくないとして斥けられた。²³⁾

宣教師たちの精力的な活動にもかかわらず、潜伏キリシタンの中には改めての受洗を拒む人もいた。維新後も暫く禁教令が続いたため「崩れ」の恐怖や、神官や僧侶による檀家を寺に集めての村八分の脅しもあったが、宣教師たちの説くキリスト教本来の教義・典礼と、先祖代々口承されてきた教え・儀礼との間の乖離を高圧的な態度で非難する布教者がいたことも影響を与えた。²⁴⁾ 後に、洗礼を改めて受けてカトリック信者になったキリシタンには「復活キリシタン」、カトリックに戻らず先祖伝来の教えや祭礼を守るキリシタンにはカタカナで「カクレキリシタン」という呼称が与えられた。²⁵⁾ 1868年、「復活キリシタン」すなわち近代クリスチャンの心を捉えて離さない神父が Petitjean と共に長崎に渡来した。Marc-Marie de Rotz である。滞在年数は46年に及び、南蛮時代に Organtino Gnechi-Soldo が「うるがん様」と慕われたように、「ド・ロさま」と敬い慕われた。布教活動もさることながら、大浦天主堂司祭から海外地区の出津教会主任司祭に転じてからは、貧農たちに自力で生活を向上する術を教えるべく、貴

族階級の出身だった de Rotz は私財をなげうって救助院を創設し、そこで織物、素麺作りやパン焼きなどの授産事業を始めた。さらに鱒網漉き工場、保育所、製粉工場などを小規模ながら開設したばかりか、設計、土木工事や医療の豊富な知識を活かして、教会建設、司教館建て替え、防波堤建設、県道改修工事、薬局開設、茶園経営、医療活動と辣腕を振るったからである。²⁶⁾ 一方、若年層の流出と関心の低下により、年齢的にも地理的にも偏在している「カクレキリシタン」は衰退の一途を辿った。²⁷⁾

2. 南蛮渡来

2. 1. 活版印刷

前述したように、Valignano は順応主義の最終目標を日本人司祭の育成に置き、必要な教育制度を導入した。従来の簡単な読み書きとローマ字教会付属学校、聖職者を養成する中高等教育機関の *seminario*、司祭育成のための大学に相当する *colegio*、イエズス会に迎えらる者の修練院である *noviciado* と体系を組み、ほかにも聖画像の国内生産をめざして画学舎を立て、イタリアから画家兼宣教師の Giovanni Nicolao を呼んで、*seminario* で絵画・彫刻のほかにもオルガンや時計製造のクラスを担当させた。Valignano の教育の独自性は、西洋人のコピーを作るのではなく、日本人としての教養を兼ね備えた人物の育成にあった。²⁸⁾ そのため、朝 6 時に始まり夜 10 時に終わるカリキュラムは、ラテン語を通じた西洋古典の学習、日本語の習熟と日本文学、それに音楽の三本柱で構成された。*colegio* では、日本人にはラテン語の、外国人には日本語のより高度な学習が課せられ、人文科学も講じられたが、学校はおろか布教活動や日々の祈りに欠かせないテキストそのものが不足していた。ヨーロッパのような王侯貴族や大商人からの寄付があるわけがなく、布教が進むにつれ却って貧しい信者を支える負担が増す現状を、貿易やインドへの投資でどうにか乗り切っていた Valignano は、布教の成果と布教先の文化水準の高さをアピールすることで、彼らの理解と援助を求めようと使節派遣を決意した。²⁹⁾ その一行にコンスタンチノ・ドラトとアゴスチノの 2 名の少年を少年使節の従者として加えたのである。目的はヨーロッパで印刷技術を習得させることにあった。

出版が国の重要な産業のひとつであったヴェネツィア共和国の第二の都市パドヴァで二度学生生活を送った Valignano が、グーテンベルク式活版印刷機の導入を思いついたのは想像に難くない。インド管区長という寝耳に水の新任務のため、ゴアから先は少年使節に同行できなくなった Valignano はそこで帰りを待った。リスボンで 48、22、11 ポイント大小 3 種類のローマン体活字と共に印刷機を購入した一行は、Valignano と感動の再会を果たし、このとき正使原マルチノがアレクサンダー大王の故事を引用しながら恩師 Valignano にラテン語で感謝の演説を行った。ポルトガル語が堪能で技術の習得が早かったコンスタンチノは、ゴア滞在中にこれを早速“Oratio habita a Fara D.Martino”(1588)という冊子にした。史上初の日本人による活版印刷の表紙を、“Excudebat Constátinus Dourat’ Iaponius”という字句が誇らしげに飾っている。³⁰⁾ 長逗留したマカオで『キリスト教子弟の教育』と『遣欧使節対話録』を出版したあと、1590 年に印刷機が陸揚げされた加津佐では翌年『サントスのご作業の内抜書』と『どちらいなきりしたん』が上梓された。1592 年、秀吉のキリシタン迫害の危機が迫る中、印刷機は対岸の天草に *colegio* と共に移され、天草での 5 年間に『伊曾保物語』(1593) など少なくとも 12 点を出版。その後 *seminario* も *colegio* も

長崎に移され、長崎がキリシタン版の中心地になる。しかし、時代が豊臣から徳川に変わり、1614年に峻厳さにおいて秀吉の禁教令を凌駕する家康の伴天連追放令が出されると、長崎の教会および教育・医療施設は徹底的に破壊され、宣教師ら全員が国外追放となった。このとき、中浦ジュリアンは潜伏し、原マルチノとコンスタンチノはマカオへ渡った。ローマ字のみならず国字でも数々の本を生み、内31点を現在に伝える活版印刷機は、マルチノやコンスタンチノらと共にマカオへわたり、その後二度と日本に戻ることはなかった。³¹⁾

2. 2. ロマンズ語と日本語の出会い

日本人が最初に出会ったロマンス語は日常会話ではポルトガル語であり、教会関係ではポルトガル語にラテン語が加わり、やがてスペイン語も翻訳にあたって学習の対象となっていく。Xavierは布教にあたって、インド管区で使用していた29か条の教理問答集(カテキスモ)をヤジロウことパウロ・デ・サンタ・フェに訳させたと考えられているが、真言宗の用語を用いてDeusを「大日」と訳すなどしてさまざまな混乱や誤解を生じさせたために、後にキリスト教関係の用語は原語主義を原則とし、その場合はひらがなで音を転写した。³²⁾ 本稿では、1599年に長崎で出版された『ぎやどべかどる』(GVIA DO PECADOR)をとりあげ、転写に見られる音韻上の主だった特徴を以下に分類した。原書はLuis de Granadaの"Guía de pecadores"であるので、書名から一見ポルトガル語版を底本としているように見える。尾原・豊島(2001:370-71)はこの点について、1600年以前のポルトガル語版は存在せず、伊、羅、仏、希、英語版のいずれも原書どおりに「罪深き者」が複数形であることから、スペイン語版を底本としてラテン語版を参照しつつ訳出し、書名は和製ポルトガル語をそのままローマ字に置き換えたと推論している。

- ① /f/のハ行音への転化 : inferno いんへるの
- ② 連続子音への後続音節の母音挿入 : propheta ぼろへた sacramento さからめんと
(例外 Christão きりしたん→先行母音挿入も、abstinentia あぶすちねんしや→母音挿入なし)
- ③ 二重母音のヤ行音による母音分立。ただし、/eu/、/eo/ともに/ejo/ : Octaviano おくたびやの Cartuxa かるつうしや anjo あんじよ Iudas じゆうだす beato ベやと religião れりじよん Hebreus へべれよす teologia てよるじや (例外 Alexandre あれしあんでれ→ア行による母音分立)
- ④ アクセントのある単母音の長音化を正確に転写。長音表記は当時の慣習に同じ : Cartuxa かるつうしや Josefじよぜいふ(家司けいし) fides ひいです Gregorio げれがうりよ(強力がうりき) São Jacobe さんじやかうべ(更衣かうい) Apostolo あぼうすところ pater noster ぱてるなうすてる(脳天なうてん)
- ⑤ /d/と/z/の違いの転写。近畿・九州方言に存在しない/z/は/ʒ/に転化 : São Dionisio さんぢよにじよ Santa Luzia さんたるじや
- ⑥ /ʒe/と/ʒe/を/ze/に転化 : Gegemania ぜぜまにや gentio ぜんちよ
- ⑦ s以外の子音で終わる閉音節への母音添加 : Josafat じよざはつ David だびつ util うちれ

これらの表記法による読み方はそのまま潜伏キリシタンに受け継がれていくが、テキストの消失などにより口承による伝達が主流となったグループでは、時の流れとともに外来語は意味を失い、音は単なる記号列と化し、教義も

脱キリスト教化して、表面的なカモフラージュであった仏教神道が祖霊崇拜や神寄せという形で基部へと浸透していったと思われる。その変化を例示すると以下ようになる。下段がカクレキリシタンの用語である。

ecclesia	penitencia	companha	paraiso	purissima	Lucifer
えけれじや	ぺにてんしや	こんぱにや	ぱらいぞ	ぷりしま	るしへる
えきれんじや	おてんぺんしや	こんぱんやー	ぱおでいぞ	ぷりんしま	じゅすへる

3. 結び

南蛮人と共に日本に入ってきたのはキリスト教だけではない。衣服、調度、什器、楽器、食物といったハード面だけでなく、ソフト面である最先端の科学知識も流入した。議論を挑む僧侶、武士などの知識階級を納得させ大きく改宗へと導いたのは、自然の理と神の摂理を理路整然(少なくとも当時はそう見えた)と結び付ける論法にあった。実際、日本向けに編まれた『講義要綱』(Compedium)は「天球論」から始まる。しかし、南蛮文化は禁教の重圧と幕府の海禁政策によりほとんどが消えた。そのことは土産品のカステラとビードロを除き、長崎方言の中に「ばんこ」(縁台>banco)と「ぼうぶら」(南瓜>abóbora)の2語しか当時の外来語が残っていない事実が雄弁に物語っている。

註

- 1) 本稿は、日本ロマンス語学会第45回大会(長崎県立大学、2007年5月26日)において口頭発表した内容に加筆修正したものである。
- 2) アンジロウという名前はXavierによる綴りAnjiroによる。ただし、João Rodriguez Tçûzu(1622?)はAngeroと書く書物が多いが、正しくはYajiroであると述べている(『日本教会史』下巻:296-97)。大住(1999:23)はこの点に関して、当時の綴りでは山口はAmanguchiと書き、語頭のyが脱落しgの前にnが付いているので、逆に、Anjiroの語頭にyを補い、nを取り去ればYajiroが現れると指摘している。ただし、聖人の用いた綴りをそのまま使う姿勢は今日のカトリック界も受け継いでおり、Cosme de Torres一行と僧侶らの山口での論争を扱ったVentura(2007)の論文の題名にもAmanguchiが使われている。
- 3) 大住(1999:154)によれば、これはユリウス暦の日付であり、後に天正の遣欧少年使節が謁見することになるグレゴリオ13世が新たに制定した現行のグレゴリウス暦では8月25日にあたる。
- 4) 清水(1997:57-58)は、『鉄炮記』(1606)から種子島に漂着したポルトガル船にも王直が乗っていたと述べているが、大住(1999:174-75)は、記述内容から船の種類はポルトガル船ではなく大型ジャンクであり、王直が同船していたかについては多少疑問が残るとしている。
- 5) 若桑(2003:16-26)、五野井他 a(2006:18)
- 6) 太田他(1999:61-64)、五野井他 a(2006:16-17)、清水(1997:58)
- 7) 若桑(2003:245-46)、鶴田(1983:132)、五野井他(a2006:36)
- 8) 狭間(2005:55-70)、若桑(2003:84-94, 98-110)
- 9) 若桑(2003:155)、五野井他 b(2006:38)
- 10) 一部の宣教師のこうした態度は大きな禍根を残し、ことに僧侶や儒者に果敢に論争を挑み、日本史上初の宗教解説書と目される『妙貞問答』(1605)を著したイエズス会士不斎ハビアン(1605)の突然の棄教は、イエズス会に打撃を与えただけでなく、棄教後に著した反キリスト教論の『破

提字子』(1620)は、禁教・迫害する側の理論上の支えとなった。若桑(2003: 84-94)、狭間 (2005: 58)

11) 若桑(2003:232, 316-18, 334-40)は、三人のキリシタン大名は「主の御顕現の日」の東方三博士に擬せられたのであり、正使である伊東マンショと千々石ミゲル、身分も高くラテン語に堪能な原マルチノの三名はそれぞれ名代の役を果たしたが、身分が劣るもう一人の副使、中浦ジュリアンは急病を理由に教皇グレゴリオ 13 世の公開謁見式へ参加できず、ひとり密かな別行動を取らされたのは、「馬にまたがった東方からの三使節到来」というイメージの犠牲になったのではないかと推論している。それが事実ならば、千々石ミゲルは帰国後 10 年余りで棄教して迫害する側に加わり、伊東マンショと原マルチノはそれぞれ長崎とマカオで病死し、中浦ジュリアンだけがかつての遣欧使節であると高らかに名乗って、残虐な拷問に耐えて殉教したのであるから、まことに皮肉な巡り合わせと言うほかない。ただし、当時の記録ではシスト 5 世の戴冠式と司教座獲得式の両方に中浦ジュリアンは病欠しているのに、バチカン図書館のシスト 5 世の間の壁面を飾るフレスコ画『ラテラノ教会行幸図』には馬上の四少年使節が描かれている謎については、記録と絵画の間に齟齬があるとしか述べていない。

12) 若桑(2003:175, 365)

13) 長崎県内だけでなく、五島では、改宗した塩製造人 500 人が仏像を自分らの竈で焼却し、島原の加津佐と口之津では、険しい場所の洞窟に避難させてあった仏像を、準管区長の Coelho が先頭を立てて探し出し、大きな仏像は司祭館の炊事用の薪に、小さい仏像は子供らに嘲笑と共に村中を引きずり回させ、破壊した墓石 135 点を日野江城に登る階段の踏み石にした。若桑(2003:150)、大石(2005:45-46)、林田(1973: 66-67)

14) Frois と Organtino Gneccchi-Soldo の書簡によれば、1586 年、有馬と大友を島津の脅威から救うよう、大坂城に秀吉を訪ね懇願した Coelho に、秀吉は朝鮮と中国を征服するために必要な大型帆船 2 艘を調達するように言い、Coelho の通訳をした Frois は、秀吉が九州に軍を進める場合は準管区長 (Coelho) が九州の全キリシタン大名を秀吉側につける努力をしようと声明したという。若桑は、秀吉は宣教師というものはキリシタン大名を戦争に動員でき、彼らを支配できることをこのとき確認し、のちの大弾圧の火種になったと指摘する。つまり、九州平定と朝鮮征伐のためにはキリシタンを利用するが、伴天連はキリシタン大名を支配し、軍事にまで介入する危険な存在として警戒するに至ったという解釈である。謁見に陪席した Gneccchi-Soldo は「うるがん様」と呼び慕われたほどの日本人最良で、秀吉の前では話題が軍事に及ばないように配慮して通訳を申し出たが Coelho は許可しなかったという。若桑(2003:385)、Boscaro(1997)

15) 秀吉はフィリピンを帰服させる野望から、入貢を脅迫的に迫る国書を送りつけた。マニラ総督は国書の真偽を確認させるため使者を送り名護屋で秀吉に謁見させたが、秀吉の書状を持って帰国するはずの神父が病死。Pedro Bautista はその後任としてマニラから派遣されたフランシスコ会士で 1593 年に来日。若桑(2003:430-38)

16) 実際に、ポルトガルやスペインの脅威は皆無に等しかった。ポルトガルはアフリカを周り、インド洋、東シナ海を 2 年ないし 2 年半かけて軍隊を送り、征服後は総督府も維持する必要があるので物理的に不可能だった。スペインはフィリピンを領有していたが、マニラからアカブルコへ香料と中国の絹を運び、復路でメキシコの銀を持ち帰るガレオン貿易の利鞘のほうが、資源に乏しい日本を征服するよりはるかに巨額で安全であった。若桑(2003:445-46)、尾原(1997:466)

17) 大石(2005:54-61)のように、千々石ミゲルの棄教について、主君である喜前が 1606 年に改宗した時とする説と、若桑(2003:511)のように 1601 年のマカオ留学の選に漏れたのがきっかけで、1603 年版イエズス会名簿から名前がなくなるまでの時期に棄教したとする説がある。いずれにしても、棄教はしても仏教に改宗はしなかった。実際、大村に清左衛門の墓はなく、息子の玄蕃が 1633 年に相次いで他界した父母のために建てた夫婦墓が諫早市多良見町山川内(旧伊木力または壱岐力村)で発見されたのは 2003 年になってからである。そこは一時期清左衛門の知行地のひとつであった。膨大な資料にあたって墓を確認した大石(2005: 127-29, 165-170)は、墳墓の地は以前はキリシタン関係者のため

の墓地であったので、晩年に再びキリシタンに立ち帰った可能性が高く、玄蕃も法華宗は表向きで内実はキリシタンであったと推論している。

- 18) 1622年の56人中1人は火あぶりの熱さに耐えかねて十字架を離れたので殉教とは認められていない。したがって、本稿では文献で殉教という言葉を用いていても、確認が可能な場合を除いて処刑という言葉を用いた。五野井他 c(2006:22-33)、鶴田(1983:136-154)
- 19) イエズス会側の誇張があるにしても、全国の受洗者数は17世紀半ばまで約76万人であった。五野井(1990:12)、狭間芳樹(2004:31)
- 20) 「崩れ」は、仏像建立のための勸進の拒否、檀那寺の僧侶の立会いなしの自葬、懸賞金目当ての密告などにより起きた。最大の「崩れ」は1657年の大村の「郡崩れ」で411人が斬首、20人が永牢。最新の「崩れ」は1867年の「浦上四番崩れ」であった。禁教政策は明治新政府にそのまま受け継がれ、1871-73年の岩倉使節団に米国などから禁令解除の勧告が出たのを受けて、1873年に「キリシタン禁制の高札」が撤廃されるまで布教は自由ではなかった。「安寧秩序を妨げず」という条件付きながら信教の自由が認められたのは、1889年の大日本帝国憲法第28条による。太田他(1999:299-301)、五野井他 d(2006:6-9, 20-23, 38-39)、五野井他 e(2006:7)、鶴田(1983:135, 149)、若桑(2003:320-21)
- 21) このとき応じた Petitjean 神父は感動のあまり、「サンタ・マリアの御像はどこ」という問いの部分は言うまでもなく、その後次々訪れる浦上のキリシタンから聞かされるオラショもできるだけローマ字の日本語で表記した。また、万が一信徒に壘が及ぶのおそれ、出身がわからないように地名は綴りを逆にして「平戸」を odarih のように記した。片岡(1986:68-72, 180)
- 22) 特に問題となったのは洗礼の有効性であったが、離婚者や近親者との婚姻があったので結婚の秘蹟にも疑義が出た。ヴォルペ(1994:20)
- 23) 太田他(1999:297-98)、ヴォルペ(1994:26-28)
- 24) 実際、大浦天主堂での劇的な邂逅から2年後に起きた「浦上四番崩れ」では、浦上村の68人が捕縛されて拷問の果てに21人が棄教した。五野井他 e(2006:6-7)、宮崎(1996:25-26)、宮崎(2001:65)
- 25) ヴォルペ(1994:44-48)、太田他(1999:315-16)、宮崎(1996:30-34)
- 26) de Rotz が手がけた建造物のうち、旧羅典神学校、鯨網工場跡(現ド・ロ神父記念館)、旧出津救助院は国の重要文化財に、出津教会と大野教会は県指定有形文化財に指定されている。なお、明治32年に県に提出した宣教届などに見られる本人による日本語式の名前表記はマルコ・マリヤ・ドーロである。矢野(2006:20-21, 53-61, 83, 104-113, 120-47)
- 27) 宮崎(2001)によれば、カクレキリシタンは生月島と旧外海町の出津と黒崎にわずかながら残存するが、その他は解散したか自然消滅した。
- 28) 日本初の有馬のセミナリヨには22人が学び、その中の4人が2年後に遣欧少年使節として選ばれた。若桑(2003:156-61)
- 29) 若桑(2003:166-6, 271-72)
- 30) 松久(2005:18)、五野井他 b(2006:26, 48)、小島(1994:33-35)、若桑(2003:272, 488, 497)、Üçerler(2005:9)、高祖(2006:2)
- 31) 五野井他 b(2006:47)、若桑(2003:502) 加津佐本5点、天草本12点、長崎本14点の計31点。ほかに京都本1点がある。
- 32) 尾原(1998:431-37)、松岡(1991:407-8)

参考文献

- Ventura, Ricardo: "As disputas de Amanguchi-Testemunhos", *Revista Lusófona de Ciência das Religiões*, 11, Universidade Lusófona do Porto, 2007, pp.83-95.
- ヴォルペ、アンジェラ 『隠れキリシタン』、南窓社、1994。
- 大石一久 『千々石ミゲルの墓石発見』、長崎文献社、2005。

- 大住広人『ザビエルとヤジロウの旅』、葦書房、1999.
- 太田淑子編著『日本小史百科(キリタン)』、東京堂出版、1999.
- 尾原悟解題・解説『イエズス会日本コレジヨの講義要綱Ⅰ』、教文館、1997、pp.446-67.
- 『イエズス会日本コレジヨの講義要綱Ⅱ』、教文館、1998、pp.411-56.
- 『イエズス会日本コレジヨの講義要綱Ⅲ』、教文館、1999、pp.279-339.
- 尾原悟解題・豊島昌之解説『ぎやどべかどる』、教文館、2001.
- 片岡千鶴子解題『プチジャン司教書簡集』、純心女子短期大学長崎地方文化史研究所、1986.
- 五野井隆史『日本キリスト教史』、吉川弘文館、1990.
- 他監修『旅する長崎学1、キリタン文化Ⅰ』、長崎文献社、2006a.
- 他監修『旅する長崎学2、キリタン文化Ⅱ』、長崎文献社、2006b.
- 他監修『旅する長崎学3、キリタン文化Ⅲ』、長崎文献社、2006c.
- 他監修『旅する長崎学4、キリタン文化Ⅳ』、長崎文献社、2006d.
- 他監修『旅する長崎学4、キリタン文化Ⅴ』、長崎文献社、2006e.
- 高祖敏明解説『SANCTOS NO GOSAGVEONO VCHI NVQIGAQI』(サントスのご作業の内抜書)、雄松堂、2006.
- 小島幸枝『キリタン文献の国語学的研究』、武蔵野書院、1994.
- 清水 元『アジア海人の思想と行動: 松浦党・からゆきさん・南進論者』、NTT 出版、1997.
- 鶴田文史編著『西海のキリタン文化綜覧』、天草文化出版社、1983.
- 林田 第壹號『加津佐郷土史 加津佐史話』、加津佐町、1973.
- 狭間芳樹「近世日本におけるキリスト教伝道の一様相—キリタン文書に見る「近代的敬虔」とキリスト教受容—」、『アジア・キリスト教・多元性』、現代キリスト教思想研究会、第2号、2004.
- 「日本及び中国におけるイエズス会の布教政策—ヴァリニャーノの「適応主義」をめぐる—」、『アジア・キリスト教・多元性』、現代キリスト教思想研究会、第3号、2005.
- Boscaro, Adriana: “Una letteratura compagna dell'uomo per l'eternità”, *Asiatica Venetiana*, Università Ca' Foscari di Venezia, 1997.
- 松岡洸司『キリタン語学-16世紀における』、ゆまに書房、1991.
- 松久卓「天正遣欧使節随員の印刷術の習得」、『国際印刷大学校研究報告』、第5巻、2005、pp.16-20.
- 宮崎賢太郎『カクレキリタンの信仰世界』、東京大学出版会、1996.
- 『カクレキリタン オラシヨ—魂の通奏低音』、長崎新聞社、2001.
- 矢野道子『ド・ロ神父 黒革の日日録』、長崎文献社、2006.
- Rodriguez Tçûzu, João: *Historia da Igreja do Japão, 1622?* (会田由他監修『日本教会史』、岩波書店、1970.)
- Üçerler, M. Antoni J.: “Gutenberg comes to Japan: The Jesuits & the First IT Revolution of the Sixteenth Century”, The Ricci Institute Public Lecture Series, edited and revised transcript, 2005. (<http://www.usfca.edu/ricci/events/Ucerler.pdf>)
- 若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ』、集英社、2003.